
クリア-スペル小話集

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリア・スペル小話集

【Nコード】

N8743X

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

作者自身が書きながら、思わず突っ込みを入れてしまった疑問や「ありえんだろ（最初はこうしたけど、やっぱり無理がある）」的なifルートを適当に突っ込んでみた小話集です。コメディ色が強いです。一話一話が短めで、どうでもいい話が多いです。オチはありません。更新も思いついた時にします。そしてなにより、キャラ崩壊が一部で起こる可能性があります。設定として入っていた性格ですが、本編ではなかなか出ない部分です。そのため、「おまえ、そんなキャラじゃないだろ」的な部分が多数見受けられます。そう

いったものが苦手な方はお引き取りください。

そういえば……（魔王編）（前書き）

魔王編だけでなく、作者がずっと思っていた疑問点。

そういえば……（魔王編）

私はこの世界に召喚され、いきなり魔王になった。しかも魔族を救えとぬかしやがる。正直、非常にめんどくせえが助けないといけない。そして、これはそんな旅の中でふと考えてしまった事柄である。

「……そういえば私、この世界に来てから一度もお風呂に入っていないじゃか？」

隣を歩くクリスが不思議そうな顔でこちらを見た。

「お風呂？ なにかしら、それ」

「いや、風呂と言ったら風呂だろう。こう、湯船にお湯を張ってだな、それに浸かって一日の身体の疲労を癒やすための、非常に大切な手段だ。いや、それ以前に身体の汚れを落とすためにも非常に重要な事だ」

クリスは想像できないのか、不思議そうな顔をしている。

「あまりよく分からないけれど、あなたの故郷では頻繁にしていた事なのかしら」

「頻繁というより、毎日だな。ちなみに、私はぬるめのお湯が好きだ。熱過ぎるお湯だと入れない」

「それ、何か関係があるのかしら」

「関係あるぞ。丁度良い感じのお湯だと、うつかりそのまま寝てしまつくらいに気持ち良いんだ。この世界の人々は損をしている」

これはゆゆしき事態ではないだろうか。魔族なんか救うよりも先に、自分の身の回りの最低限の物をそろえた方が良くもしいれない。

(いやいやいや。このままこの世界に居着く気はないぞ。居心地を良くしてどうする……いや、これは人間として最低限必要な事なんじゃないか?)

そんな事を一人悶々と考えていると、クリスが横から声をかけてきた。

「そういえば、身体の汚れを落とすとか言っていたけれど、魔族になつたのだから、あまり必要はないわよ」

「!」

私はこれ以上ないほどの速さでクリスを見る。

「わたしたち魔族は、基本的に食べ物とかを食べないから、身体からそういつた物を排出する必要もないのよ。それに魔族の場合、身体の汚れとかは勝手に空気中に分解されてるわ」

なんだ、その都合が良過ぎる設定は。

(つて事は、魔族つてもものすごく燃費の良い種族なのか？ だつて強い魔族だと、ご飯は全く必要ないし、その上排出もしないとは……とっても環境に優しいな)

私は思わず、少しずれた事を考えてしまう。

(というか、魔族は霞みでも食ってんのか？ 仙人みたいじゃないか!)

おっと、話が逸れた。

だが、ついこの間まで元の世界でお風呂に入る生活を送っていたのだ。正直、いきなり入れないと言われると、余計に入りたくなる。

「やっぱりお風呂に入りたい……」

すると、クリスが首をかしげる。

「お風呂って、要するにお湯を浴びれば良いのでしょうか？ だったら、こつしちやえば良いんじゃないかしら」

私の頭上から滝のようなお湯が降ってきた。しかも、微妙にぬるい。適温ではない上、これでは浴びた後に風邪をひきやすいだろう。いや、それ以前に勢いが強すぎて地面に押しつぶされてしまったのだが。

私はゆっくりと、ぬるい水をたまりから立ち上がる。髪の毛や服の裾から水がポタポタと落ちた。

クリスはにっこりと微笑む。

「気持ち良かったかしら？」

「……突っ込む所が満載すぎて、なにかから突っ込んだら良いかわからないが、とりあえず、気持ちだけは受け取っておく」

「そう。良かったわね」

クリスに余計な事は言うまい、と思ったのはこの時だった。

そういえば……（魔王編）（後書き）

本編では出てこない、綺麗好きな面もある主人公。綺麗好き、というよりも、女の子としては大切な事ですからね。ちなみに、この世界の普通の人も水浴びくらいはしています。たまに。

実はこのお話は物語の重要な部分に関わっていたりします。ですが、そこまで深く考える必要はありません。

もしもクリスが男だったら……（魔王編）（前書き）

最初の設定ではクリスは男でした。でも無理かな、と思い男にしました。

これはもしかしたらあったかもしれない、そんなifルートです。

もしもクリスが男だったら……（魔王編）

魔王とクリスが出会うシーン（男バージョン）です。飛びまくりま
す。一部そのまま抜粋してます。

*

私は大きく溜息をついた。

（目立つ行動は避けたかったんだけど）

私は魔族の前まで歩く。騎士団たちがそれを止めようと動くが、
噴水の水が暴れ、騎士団を人垣へと流し込む。音が聞こえなかった
ので、ずいぶんと唐突に現れたように思えた。私は魔族を見下ろす。

「動けるなら、なんで最初から動かなかったんだ。余計な手間だ」

魔族は短い銀色の髪をしている。その魔族は水のように澄んだ青
い目を細め、にっこりと微笑んだ。私の腕を引っ張り、手の甲に軽
くキスをする。

私は目を丸め、すぐに顔を思いつきり顰めた。即座に掴まれてい
る手を引き抜き、その手をマントの裾で手を拭う。

「笑って誤魔化すな。口で言え」

（もしかして、余計な事をしてしまったのか……？）

内心で考えつつ、相手は自分の所為で喋れないんだと気付く。私
は魔法を解除した。同時に、頭痛が少し和らいだ。周囲に音が戻る。
戻ってきた音は、ただの騒音にしか聞こえない。だが今更、戻す気
にもなれなかった。

魔族は立ち上がり、にこやかな笑みを浮かべる。私はそれを睨みつけた。

「助かったよ。ありがとう」

「別に気が向いたただけだ。それに誤魔化すな、と言っている。……まあ、ここから逃げるのが先か。行くぞ」

*

「その魔族、何をした！」

騎士が私たちの周りを取り囲んでいた。じりじりと包囲網は狭まってくる。

「わたしは何もしていませんよ」

隣にいる魔族は飄々（ひょうひょう）と答えた。しかも爽やかな笑顔付きで。

「……………」

しかしこの状況、滅茶苦茶めんどくせえ。頭痛も酷いし、最悪だ。表情には出さないように堪えているが、顔を顰めずにはられない。冷や汗も止まらなかった。

私もこのまま捕まるのだろうか。それはご免だが、かといって今更、魔族を見捨てるのは無理だった。なんとか状況を打開しなければならぬ。

「あー……めんどくせえ」

思わず口に出して呟く。

突如、大量の水が騎士たちを地面に押し付ける。騎士たちはもがくが、動く事は出来ないようだ。私は隣を見た。魔族はにっこり、と笑みを浮かべている。

「お役に立てたかな？」

「……………」

私は頭痛と耳鳴りを堪えながら、無言で人垣を通り抜けた。若干ふらつくが、気にしない。その後ろを当然のように魔族がついてくる。

人混みを通り過ぎ、人気のない路地へと入った。しばらく歩いて私は背後を振り返る。そしてそこには当然のように先程の魔族がいた。

私は魔族から注意深く距離をとる。

「なんでついて来るんだ」

立っているのが辛くなり、壁にもたれかかるが、視線は魔族から逸らさない。正直、この魔族は怪し過ぎる。

「だって、君が助けてくれたんだよね？」

近くで見る彼は肌も白く、顔立ちも整っている。いわゆる美形として見られる人だった。

だからこそ、なおさら怪しい。

私は男に好かれない容姿をしている自覚がある。なので下心のない者が寄って来る筈がない。よって、この魔族は怪し過ぎる。

「わたしは見ての通り、行く場所がないんだよ。だから、ついて行

「ってもいいんじゃないかな」
「なんで」

正直、怪し過ぎるのを除くとしても、この男のような目立つ容姿の魔族と歩くのは避けたかった。いや、やっぱりそれ以前に胡散臭すぎる。警戒するな、という方が無理だ。こんなのがついて来るとか、勘弁してくれ。

「恩返しと言ったら？」
「いらん」

というか、信用できん。心の底から恩返しとか、いらん。
私は壁に手を付きながら歩き出す。

「ねえ」

魔族は変わらずついて来る。

「どうして君は魔力を垂れ流しているの？ それじゃあ、暴発しちやうよ」

私は足を止める。後ろを振り返った。

「やっぱり？ 君のさっきの沈黙魔法は無自覚だったんだね。いくら魔力が多くても、あんな規模の大きな魔法をあんなに持続させるなんて、自殺行為だよ。おまけにその後の複数に対する飛行魔法にしたって、出鱈目すぎる。君、死にたいの？」

私は魔族を睨みつけた。

「何が言いたい」

さっさと要件を言えオーラを振りまく。ただでさえ頭痛が酷いのだ。その上、不審者に付きまとわれるのは勘弁して欲しい。

「わたしが一緒にいた方が、なにかと便利なんじゃないかな」

魔族はにっこりと微笑んだ。

(胡散くせえ)

「……半径三メートル以内に近付かないと約束してくれるなら」

「ここが妥協点だった。」

もしもクリスが男だったら……（魔王編）（後書き）

手の甲にキスシーンを書いている時、寒気がしました。肌が粟立つというのを初めて感じました。本当にクリスが女でよかった……。

主人公の容姿は中の下という設定なので、元々、自分の容姿では男が寄ってこない自覚があります。そのため、基本的に理由もなく寄ってくる男は始めから疑ってかかります。妙な所で現実主義です。こうなる状況も見えていたので、クリスは女にしました。偏見と受け取られた方はすみません。魔王さまの性格です。

団長の場合は、男性としてよりも騎士団長という役職で見ているため、ここまで疑われていません。ただの警戒心のみです。

騎士見習いモドキと団長（魔王編）（前書き）

長いです。そして戦闘描写あります。

騎士見習いモドキと団長（魔王編）

騎士見習いモドキになって、二日目。

初日はコテンパンに団長にやられた。私は魔法ありで、団長は魔法なしだったにも関わらず。その事がなんとなく悔しかった。

（そもそも、私は魔法の使い方が非効率なんだよな）

中庭に出て、両手を握ったり開いたりする。

という事は、魔法の訓練をすれば多少は使えるようになるのではないだろうか。制御リングを付けている状態でどこまで出来るか、実際に試してみる必要もある事だし。

私は早速、箆手を想像する。瞬時に何かが纏ったのを感じた。自身の手元をよく見てみると、そこには箆手がある。ここまでは普通に出来た。

（けど、いくらなんでも徒手空拳はマズイよな）

箆手を身に着けているとはいえ、箆手自体は攻撃よりも手を守るために着けているようなものだ。つまり、守りに特化している。元々、私は人を殴れないので、そこは大して問題ではない。

（だけど、問答無用で大人数に襲われた場合はどうする？）

それこそ、人を傷つけなければならぬ状況だ。反射的に殴ってしまう事はあるが、基本的に二度目は意識してしまう。私の躊躇いを見逃すほど、襲撃者は優しくくない。

そうになると、相手をなるべく傷つけず、なおかつ相手の戦意を根

こそぎ奪うのが有効になるだろう。

(そういえば、見た目で痛みを判断できる武器は、相手の戦意を削ぐって聞いた事があるな)

相手の戦意を削ぐ武器って、なんだ？

電動ノコギリ、とかか？

いや、そもそもこの世界に電動ノコギリは存在しないだろう。それでは相手は恐怖を覚えない。かといって刃物を振り回すのも、逆に私が怪我をする気がする。
という事は、刃物は却下。

(そもそも、私は武器なんてほとんど知らないしな)

壁際に目を向けると、武器の入った樽がある。様々な武器が入っているが、正直あまりピンとこない。それに、そういった物を持た私は恐怖の対象になるのだろうか。

……………ないな。

そもそも坊主、と気軽に呼ばれてしまうほど、私は幼く見られている。つまり、子どもとしか見られていないのだ。

(相手の戦意を削ぐってのは無理だな)

それこそ巨大な狼とかに姿を変えた方が、まだマシだ。

私は狼に姿を変えてみた。制御リングを着けていても、普通に姿を駆る事が出来た。意外にも不都合はない。私はすぐに姿を戻す。

私は空を見上げた。鳥が気持ち良さそうに羽ばたいている。

(私も飛ばうかな……)

鴉に姿を変えようとした時、頭上を何かで突かれた。後ろを見ると、団長が剣の鞘で私の頭を突いている。

「なんだ」

「お前こそ、なにしてんだ？」

「大人数に囲まれた時の対処法を考えていた」

団長は呆れた様に溜息を吐く。

「そんな事なんか考えてないで、さっさと俺を殴れるようにならないとな」

「……………そうだな。お前のその鼻っ面を思いっきり殴ってやりたいな」

「その意気だ」

団長はにやり、と笑う。

私にはこの男の真意が測りかねた。敵であるはずの魔族を、どうして訓練するのか。しかも普通の騎士団員とは明らかに扱いが違う。傍から見ると、ただ気まぐれに団長が稽古をつけているだけなのだ。完全に騎士団員とは見られていなかった。

「本当に、何を考えているんだ」

「さあな。無駄口叩く暇があるなら、手を動かせよっ」

団長は鞘に入れたままの剣で突きを放つ。唐突な行動で、私は咄嗟に右手で突きを受け止めてしまった。

「いつ……」

鞘に入っているにも関わらず、手の平を貫かれるかと思った。当然、手の平だけで抑えきれはるはずもなく、私は手の平ごしに胸を強く突かれる。後ろに飛ぶ事も出来ず、そのまま後ろに倒れ込んでしまった。即座に立ち上がるが、手の平を開く事が出来ない。反対の手を駆使してようやく開くが、痛みあまり、すぐに閉じてしまう。

「おいおい、今日は一気におしまいか？　こんな不意打ちにも対応できないとはな」

この前まで普通の学生だったんだ。反応しろという方に無理がある。

だが、そんな事は口に出す事は出来ない。それこそ、頭を疑われるというものだ。

「騎士団のくせに、不意打ちとはな。ならず者に職業を変えた方が良いんじゃないか？」

「そんだけ無駄口叩けるなら十分だな」

私は立ち上がり、左足を後ろに引いて半身になった。その身体の横を剣が通過する。半身にならなければ、前回と同じように肩を打たれていただろう。

私は籠手を纏わせる。だが、右手は今日は使えないだろう。先程から上手く力が入らなかつた。

繰り出される剣を避け、避けきれない分を籠手でいなす。といっても、逸らす程度にしか出来ない。前進してくる団長の剣戟を避け、団長の懐に入り込む。そのまま剣を掴んで捻ろうとするが、背中に重い衝撃が走り、そのまま吹き飛ばされる。

「馬鹿か、お前。剣を掴む奴があるかっての」

私は立ち上がり、身体に着いた埃を払う。恐らく蹴られたであろう背中には特に念入りに払った。

「いや、武器がなくなったら良いなと思って」

「なんだ？ 殴り合いを希望か？」

「そんな物はご免だ」

団長はにやり、と笑う。

「そう言うなって」

団長は剣を鞘ごと腰に戻し、勢いよく地面を蹴った。

「マジかよー！」

思わず素で反応しつつも、団長から距離を取るために下がる。

「あまいな」

団長は剣を持っている時よりも、ずっと速かった。私は咄嗟に足元の地面を突き上げる。団長はそれを軽やかに回避した。

「これならっ」

私は団長の目の前に炎の幻影を作り出す。私の出す火はなぜか蒼い。団長は一瞬、躊躇するが即座に飛び込んできた。

「なっ」

頭に思い切り拳骨を落とされる。これが地味に痛い。私は頭を押さえて団長を見上げた。

「お前の性格を知っている奴に、はったりは通用しないな」

「ほ、本物だったらどうするんだ！ 火傷するだろ！」

私は幻影の炎と知りつつも、団長が火傷していないかどうかを確認する。

団長は黙って私を見ていた。

「……………」

団長が何事かを呟き、私は思わず団長を見る。

「今、なんて言ったんだ？」

「さあな。さっさと医務室に行け」

今日はこれで終わりらしく、団長はどこかへと行ってしまった。

(さっき、なんであんな事を言ったんだ?)

やっぱり魔王とは思えない、なんて妙な男である。魔王である事を見抜いたのは団長自身なのだ。それに私が魔王である事は、誰にも変えられない。

私には団長の考えている事がさっぱり分からなかった。

騎士見習いモドキと団長（魔王編）（後書き）

主人公はやられ放題です。うわー、大変だね。もっと魔法使えば良いのに。

完璧に作者の好みです！（魔王編）（前書き）

異様な短さ。

そして出てくる言葉はテイルズシリーズの技名です。知らない方、すみません。

キャラ崩壊がヤバいです。特に魔王さま。唐突にゲームがしたくなったので、思わず書きました。

……もしかして、アウトでしょうか？

完璧に作者の好みです！（魔王編）

「瞬迅爪！」

「三散華！」

「飛燕翔旋！」

「……さっきから何を言っているのかしら」

クリスは先程から意味の分からない言葉を口走りながら、なにかを振り回す魔王を温かい目で見守っていた。魔王は構えを解き、クリスに指を差す。

「技名だっ！　ただし、完璧にパクリだ。だから、動作は書いていない！」

「……何の話かしら」

若干困惑するクリスを無視して、魔王は続ける。

「クリス。今度、水を出したり氷出したりする時は？　スプラッシュとか？　フリーズランサー？　と言いながら使え。あえての？　ブルースファイア？　でもいいぞ」

「……意味が分からないわ」

クリスは痛む頭を抱えた。

「ちなみに、私は今度から武器に風を纏いながら攻撃する時は？　ウインドカッター？　と言わせてもらう。あと小規模な竜巻を起こす時は？　アリーヴェデルチ？　大規模な竜巻を起こす時は？　サイクロン？　と言わせてもらう。　ああ、風の槍は？　ウインドランス？　だな」

どことなく異様な雰囲気を感じられる魔王に、クリスはついて行けない。

「むっ、そうとなれば籠手を使う際の技を真似ねばならんな。楽しみだ……」

「……悪い夢かしら」

目を覚ますと、そこは見慣れた夜空が見えた。周囲を見回し、近くで健やかな寝息を立てる魔王を見つめる。

「……夢で良かったわ」

クリスは長々と安堵の息をついたのだった。

完璧に作者の好みです！（魔王編）（後書き）

以上、作者の私情によってキャラ崩壊してしまった魔王さまでした。

最初の技が五つ以上並んで、泣く泣く消しました。誰の技でしょう！

本当は「大輪月華」とか書きたかった……文字がカッコよすぎる！ 空中コンボが作者は好きです。

魔王が棒術を使うのはその辺りの影響です。

クリスがもし「氷の槍よ、フリーズランサー」とか言ったらどうなるんだろ、と考えたりします。……ちなみに、本編では絶対にありえません。言わせません。

気に触った方はすみません。作者の妄想の産物です。

四次元胃袋！？（魔王編）（前書き）

本編 第47話くらいの話

四次元胃袋！？（魔王編）

イルギスは自身の財布の中を見返し、冷や汗をかいた。

（おいおい、確かに遠慮はすると言ったが……こんなには思っ
ていなかったぞ）

恐る恐る視線を上げると、皿の隙間に黒髪黒眼の少女がいる。そしてその少女の周囲には、空になった皿が山のように積まれていた。少女はその山々に囲まれ、埋もれている様な状況である。

しかし当の本人はそれを気にした風もなく、目の前に置かれている料理を無言で口に入れていく。皿の上の料理は瞬く間に消えていった。

「うん、うまいな。これ、おかわり」

近くにいる店員に声をかけ、少女は商品の追加を注文する。最初は微笑ましく見守っていた店員も、今では苦笑いを通り過ぎ、呆気にとられていた。

（一体どんだけ入るんだよ！）

イルギスは大声で叫びたくなかった。

あまり知られていない事だが、魔族にとっての食事は他の生物のモノとは違う。他の生物は生命維持活動のために必要な事であるが、魔族はそうではない。

人などは食べた物をエネルギーとして身体に還元する。それに対し、魔族は食べた物を魔力として身体に還元するのだ。

一見すると、違いは無いように思える。しかし、これは大きな違いが存在するのだ。

魔族は本来であるなら食事を必要としない。空気中にある魔力を吸収しているためである。魔力の吸収が追いつかない時のみ、食事をとるのだ。そして、その魔力の吸収に上限は存在しない。人と言う、満腹状態にならないのだ。そのため、制限がなければ無限に食べ続ける事が可能なのである。

「なあ、他に何かあるんだ？ 全部制覇していいか？」

つまり、魔族であるこの少女は無限に食べ続ける事が出来るのだ。

当然、魔族になったばかりの少女がその事を知る筈もなく、無論、イルギスもこの事を当然知らない。

そして期待に目を爛爛と輝かせている少女に、イルギスが断れるはずもなく

「あーっ！ もう、好きにしるよ！」

「本当か？ ありがとう！ お礼として、崇めてやるよ！ あんたはすごいっ！」

手放して感謝をする少女に対し、イルギスは頂垂れるしかなかった。

この暴食は店の食材がなくなるまで続く。最終的に少女の周囲には人だかりが出来、店の食材を全て完食した旨を店員が告げると、観客たちは拍手喝采した。少女は満足そうに「おいしかった」と笑顔で述べたが、イルギスは会計を聞いて真っ青になったようである。

余談だが、この時イルギスは破産寸前までいったそうだ。そしてこの時の事から、彼は人を食事に誘う時は用心深くなったという。

四次元胃袋！？（魔王編）（後書き）

そもそもイルギスは魔族である事すら知りません。

本編に載せようか迷い、結局ここに載せました。少し長い上に、一気に気が抜けてしまう……。

でも、話の根幹に関わる重要な事その二。本編とは雰囲気の違いがあるので載せられず……。 「載せても大丈夫じゃない？」という方、言ってください。本編に載せます。

それにしても……イルギス、災難です。

とある宮廷魔術師の受難（勇者編）

彼は勇者を召喚してから身体を休める暇もなかった。
なぜなら

「待ちなさい！ 今日という今日は、授業を受けて貰いますからね
」！
「いやだってーの！ 誰がそんなの受けてられっか！」

城の中を勇者が走り回る。教育係である彼も走り続ける。しかし
いかんせん、彼は完璧なインドア派であり、運動は苦手どころか絶
望的なのだ。到底、育ち盛りの十代半ばの子供に勝てるはずもない。
結果として、彼は荒い息をつきながら、よたよたと歩く羽目にな
る。

「ま……待ちな、せいせい……さい……」

しかしすでに勇者の姿は影も形もない。

「こ……これは一体、何の……試練……ですか……」

ぱたり、と彼は床に倒れ込む。

「次会ったら……絶対に、魔術で拘束して、や……る……」

彼は執念で腕を伸ばし、息絶えた。

頑張れ、宮廷魔術師！ 勇者を鍛えられるのは君だけだ！

（勝手に、殺さないでください……）

こつして宮廷魔術師の受難は続く。

「こつ……… 続けないでえ………」

彼の悲痛な叫びは届けられなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8743x/>

クリア-スペル小話集

2011年12月4日23時49分発行